

フェルミ推定。お金で買える愛。K J法の限界。発見的発想法。

★

就職の面接試験で、「シカゴにはピアノの調律師は何人いるか？」とか「東京都内には、マンホールの蓋はいくつあるか？」といった、いわゆる“地頭（じあたま）力”を試す質問をされる。答えに窮して、「分かりません」「知りません」と言ってしまうとアウト。これは、コピペ族、検索君を見つけ出し、間違っ採用しないようにするための、いじわるの問題だ。質問されたら、短時間で推論し、妥当な桁数の答えを出さねばならない。原爆のマンハッタン計画のリーダーだった物理学者のフェルミは、この類の推論が上手で、その精度が抜群だったことから、こうした問題はフェルミ推定と呼ばれている。

実は、この手の質問は、面接担当が一番楽しさを感じることができ（それは、そうだろう。志望動機を聞いてもあまり面白いとは思えない）、いじわるな気持ちを満足させる以上の効果は期待できない、という意見もある。実際、そんなところではないだろうか。

★★

いじわるな面接試験の問題として、「愛とお金、二つに一つ、あなたはどっちを取りますか？」というのはどうだろう。いろんな見解があるだろう。①愛さえあればお金なんていらぬ、②愛はお金で買える、③お金で買える愛があったら見せてください、④愛なんてくれなくてもお金さえくれればいいの、って考えの人が世の中ほとんどではないでしょうか、私も含めて、⑤愛だけでは食っていけない、さりとてお金だけというのもちょっと、⑥お金はすべてのものを測ることができる万能のモノサシ、愛情だってお金で測れる、など。・・・基本的に全員採用！特に③の場合は、顔を真っ赤にして、涙ながらに訴えることがポイント。それができたら将来の社長候補。⑥のタイプも捨てがたい。・・・愛のためでもいい、金のためでもいい、民間企業では、とにかく一生懸命働いて稼いでくれる人であれば、それでいい。

★★★

集団面接をするなら、こんな課題で、グループ作業をさせてみたい。



課題：コアラ、パンダ、ネコ、カンガルー、ゾウ、チンパンジーを2群にわけよ。

これも、いろんな答えが考えられる。(次ページ 表1、図1、2参照)

たくさんの分類の仕方を思いついたグループのメンバーと、そのグループのリーダーは、期待できる。独創的な分類基準を発見した人も期待できる。ぜひ最終面接に進んでもらおう。

ところで、表1のような分類を模造紙の上でカードを使って行うのがK J法の基本である。K J法の初期作業では、通常、図1、2のような模造紙が1案出来たら、その後は、模造紙上に現れた構造、グループ間の関係性について図解・文章化する作業に入っていく。

実は、そこが問題で、例えば、⑤と⑦では、グループ分けはまったく同一なのに、違った図解・文章化が展開されていくことになる。同じ動物の中に違う側面（特性）を見出した（＝ある種の発想があった）のに、一方の側面は捨てられてしまう。つまり、せっかくの多様な発想が、誰かの1つの思考の癖のようなもの（分類基準）のために見捨てられ、活かされないのだ。

表 1. 6つの動物を2つのグループに分ける基準とそれに基づく分類 (○が同一グループ)

分類基準	コアラ	パンダ	ネコ	カンガルー	ゾウ	チンパンジー
①オーストラリアの生き物	○			○		
②木に登る	○	○	○			○
③食用に家畜化されている				○		
④みんなだいたい模様が同じ	○	○		○	○	○
⑤子は、超未熟児	○	○		○		
⑥子は、自力で親にしがみつく	○					○
⑦鳴き声を聞いたことがない	○	○		○		

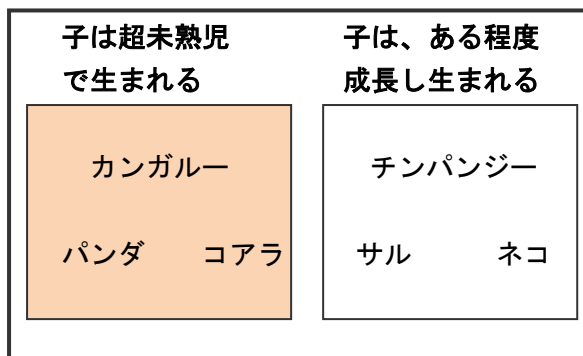


図 1. 基準⑤による整理結果

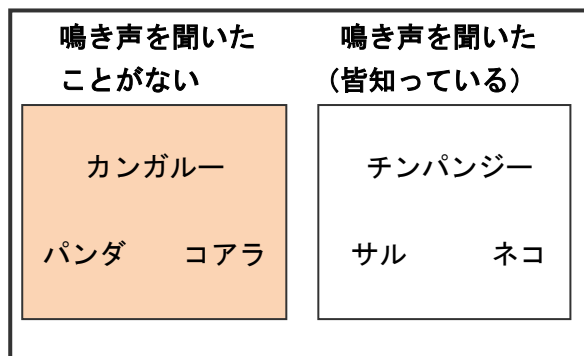


図 2. 基準⑦による整理結果

表 1 に示すように、多くの人が集まれば、同じ動物にも異なる多様な特徴を見出すことができる。そのことが、グループ作業、3人寄れば文殊の知恵、のメリットであるはずだ。しかし、実際にやっていることは、図解に使われるよりはるかに多くの“発想”を捨ててしまう作業である。もちろん、KJ法の指南書にも、何パターンもグルーピングを試みるのがよい、とあるが、出来上がった模造紙の図解・文章化という作業をするのであれば、同じ問題が残る。

KJ法は、もともと、作業中には意識しない・何らかの発想に基づいてグルーピングされた情報の束について、その相互関係を説明しているに過ぎない、とも言える。そこには、どうしても個人の思考の癖が影響して、その延長線上の発想しか生まれえない、という指摘もある。

そこで提案したいのは、複数の模造紙のクロス分析である。たとえば、まず図 1, 2 の比較から、「超未熟児で生まれる動物は、あまり鳴かない」ということを発見する。事実かどうかはあとで検証すればよい。(クロス作業は機械的であり、そこに個人の癖は影響しない。)

その後、「このことは何を意味する？」などとも思考してみる。すると、「赤ちゃんの間鳴き声を出さない動物は、成長してからも声によるコミュニケーションをしない」という発想が生まれる。さらに、「人も、よく泣く赤ちゃんがよい、と言われる。赤ちゃんの間に泣いてコミュニケーションする力が強ければ、その子は大人になっても大丈夫。それは、人間の経験知、おばあちゃんの知恵そのものではないか!」「もし、そうだとすると、赤ちゃんの時泣いても親に無視された子は、長じた後もコミュニケーション能力が低いのではないか?」・・・こんなことを思いつくかどうかは、やはり個人の経験や癖が影響するが、この一連の思考は“発想”と呼んでいいのではないか。パンダやコアラから出発して、どこかの医学部や教育学部の研究者のような着想を得る。偶然頼みではあるが、KJ法の図解・文章化に比べれば、初期の発想(最初にカードに見出した特徴)が、はるかに生きる。これは、発見的発想法(造語)である。